



Memory

ヨレクホールが開店して30年余。この場所で長い年月の間、色々なことがありました。鎌倉は、大都市圏の中にある風光明媚な、歴史ある土地柄ゆえに、取材や撮影の為、毎年多くの人々が訪ねて来られます。

その中でもっとも印象に残っているのが、映画『ツイゴイネルワイゼン』の撮影に使われたことでした。何より、撮影の主な場面に使われた鎌倉の風景の美しさに、そして不思議な会話の交わされる場面となったヨレクホールの映像に感動し、20年以上の時を経た今見ても、新鮮な驚きは変わることがありません。

左の写真は、その一場面のスチール写真をスタッフの方に分けていただいたものです。

ツイゴイネルワイゼン 1980年
制作 荒戸源次郎 監督 鈴木清順 原作 内田百閒
キャスト 原田芳雄 大谷直子 藤田敏八 大楠道代

物語は、蓄音機から流れる不思議な音色に二人の男が耳を傾けている場面から始まります。

19世紀の大ヴァイオリニスト パブロ・サラサーテが190年に自ら演奏、本人の謎の肉声も録音されている

というSF盤。いったいそれは何を囁いているのか

藤田と大谷が始めて出会う場面、雨も落ちていないのに女は輪傘をさして唄う。撮影場所は、鎌倉の切り通し、釈迦堂と鶴ヶ岡八幡宮でした。



すみれもすみれで、ひどい目にあっているのだから、さっさと逃げてくればいいのですが、グーニー譲りの負けん気と、持ち前ののん気な性格で、結構平気なものなんです。寒い夜には猫達は私の温かいベッドにもぐりこんで来るのですが、私を挟んで、右と左に、この親子がでんと動かない。どちらも引きません。その上、両側から低くグルグルと唸る声が聞こえてきます。ある時など、ついに牽制の均衡が崩れたのか、私のお腹の上でとくみ合いが始まったくらいです。まったく、冗談じゃない！勝手にしなさい、両方とも！

to be continued



COLUMN

鎌倉の猫事情 第四十話

猫は一年の内三日間だけ暑い、と言います。そのくらい猫はいつも寒いという列えなのですが、少し寒い日や、冷たい雨が降る日などは、まあよくもそんなに寝られるものだと思うほど、家の中の一番温かい場所を占領して皆で眠りつづけています。それは一見、のん気で平和な猫家族の光景にも見えますが、猫の世界もそう単純ではありません。前編でお話しましたように、一度は家族団結して手強い敵と闘い、みごとな連携で勝利を収めたグーニー一家ですが、同じ屋根の下で暮らすというのは、人間ならずともなかなか難しいものなのです。静かな日にほど、事件は起きるようです。

この頃少しグーニーの様子がおかしいとは感じていました。ただ黙って座り込んでいただけなのですが、なんとなくいえない殺気を放っているのです。その少し半開きにした視線の先には可愛いはずの長女のすみれがいたのです。その頃を境に、グーニーはすみれを徹底的に目の敵にするようになります。なんでもない時に、ふいにすみれを目掛けて飛び掛っていくのです。

とても仲の良かった親子とは思えない激しい争い方です。私も、本気で止めに入ります。すると、私の本気が伝わるのか、とまかいたんはやめるのですが、どうにも興奮がおさまらないらしく、赤い目をしてガルルルルと人の顔を睨みつけるのです。タオルを投げてやると、またガルルルと、そのタオルに食いついてきました。ふん、バカ！と言って私は立ち去り、グーニーの興奮も一様それでおさまるのですが、また、何かの拍子に始まってしまっています。

いつの間にか始まった激しい親子喧嘩に、私がグーニーをすこい剣幕で追いかけて、グーニーは、怒りにみなぎらせて振り向きまします。その白目を向いた真っ黒な顔の野蛮さには、まったくあきれまします。

その上、口の周りにすみれちゃんの白い毛をいっばいつつけているんですから、見られたざまじありません。



Beast

黒い天空からぶらりとぶら下がった振り子のような半月が、のろのろと空の高いところに昇りきって、ぬかるんだ路地や、何もかもが一緒に溶けてしまったような瓦礫の小山を照らしていた。

光の絨毯を敷きつめた華やかな都市の裏側には、こんな風にほころびて、縋いきれず、真っ黒くかけおちたような場所があちらこちらに見かけられる。二月の夜気で赤みを帯びて冷たく輝く半月が、瓦礫の小山の天辺に辿りつくと、どこからともなくぼーんと勢いよく黒い影が飛び出した。影は真っ直ぐ小山の頂上をめがけて駆けて行く。黒い影のあとを追うようにしてふわふわと着いてくる二つの影。一つは大きく、一つはとても小さい。

黒い影は月の光を浴びて小山の天辺に立った。小山を征服した大小の三つの影を半月の赤い光が映している。彼女の長い髪を夜の風がなびかせる。腰に手をあて真っ直ぐに立つ主人の姿を、二匹の獣は眩しそうに見上げた。これから彼らは、生きるための生業である夜の狩りに出かけるところである。廃墟の夜は彼らのもの。黒くかけ落ちた、彼らが支配する世界だ。

